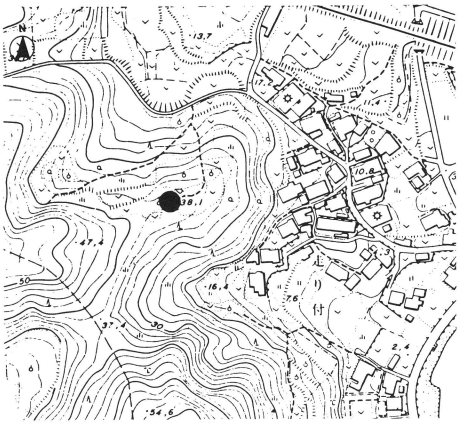
下山（したやま）古墳



第１図　遺跡位置図（1/5000）

幡豆郡幡豆町大字西幡豆と大字東幡豆の境に、北から南へ延びて海岸に迫る標高60mほどの丘陵がある。本墳はこの丘陵から東へ派生する一支丘の頂部（標高38.5m）に所在する。眼下には三河湾が一望される。地籍は愛知県幡豆群幡豆町大字東幡豆字下山（したやま）17－11ほかに所属する。本墳およびその周辺は、昭和20年代に畑地の造成を目的とした開墾をうけ、古墳の形状は著しく損なわれていた。

発掘調査の結果、遺存状態は必ずしも良好ではないが、南々東方向（E58°S）に開口する横穴式石室を内部主体とする径15mほどの円墳であることが知られた。

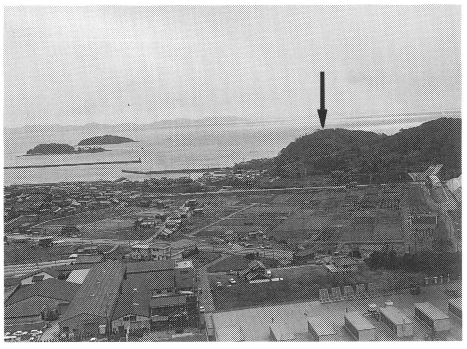
墳丘　支丘陵の頂部を利用されて築造されており、石室の西方7.5mで周溝の一部が検出され径15mほどの円墳と推察された。

石室　天井部、羨道部は亡失し、側壁上部の損壊も著しいが、玄室床面は比較的良好に遺存していた。石室は地山面を穿った方形の土坑内に構築されている。石室の平面形は、羨道部と玄室部とが区別されない「無袖式」のもので、両側壁は弧状に幾分張り出し「胴張り形」を呈す。羨道部と玄室とは、側壁の構成上においても区別されず、床面に段差を設けることでこれを区別し、いわゆる「竪穴系横口式」の形態をなす。玄室長4.05m、羨道部長（現存）0.6mをはかる。床面は二面認められた。第一次面は河原石の敷石で玄室内のほぼ全域に、第二次面は角礫を混えた敷石で玄室の南半にみられる。左壁沿いに組み合せ式石棺（長1.0m、幅0.6m）が存する。

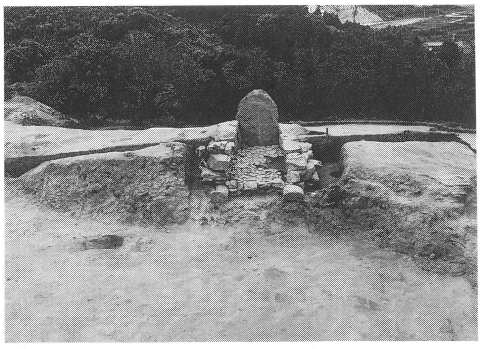
出土遺物　遺物は、全て玄室内よりの出土である。その内訳は、耳環１、管玉１、ガラス小玉５、鉄刀２、鍔片２、鏃１、鉄鏃18以上、弓飾金具３、刀子５、「刀子鞘金具」１、素環鏡板付轡２組　不明鉄器片４、須恵器（平瓶１、提瓶１、直口壺１、高杯１、杯蓋１、杯身３、壺・甕類片20）、土師器（椀１）である。

これらの遺物（須恵器・鉄鏃の形式）及び石室の構造からみて、本墳は７世紀前半代の築造になるものと推察される。

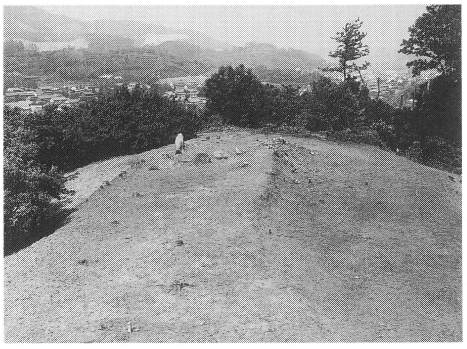
（北村和宏）



遠景（北方より）

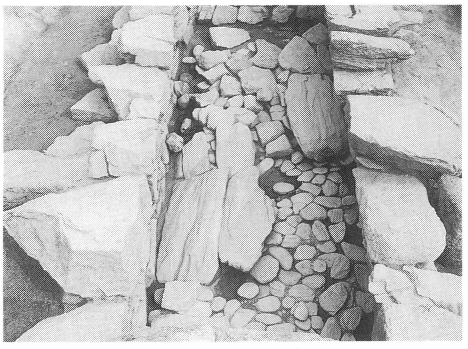


墳丘と石室（南より）



調査前（西より）

横穴式石室（第二次面）

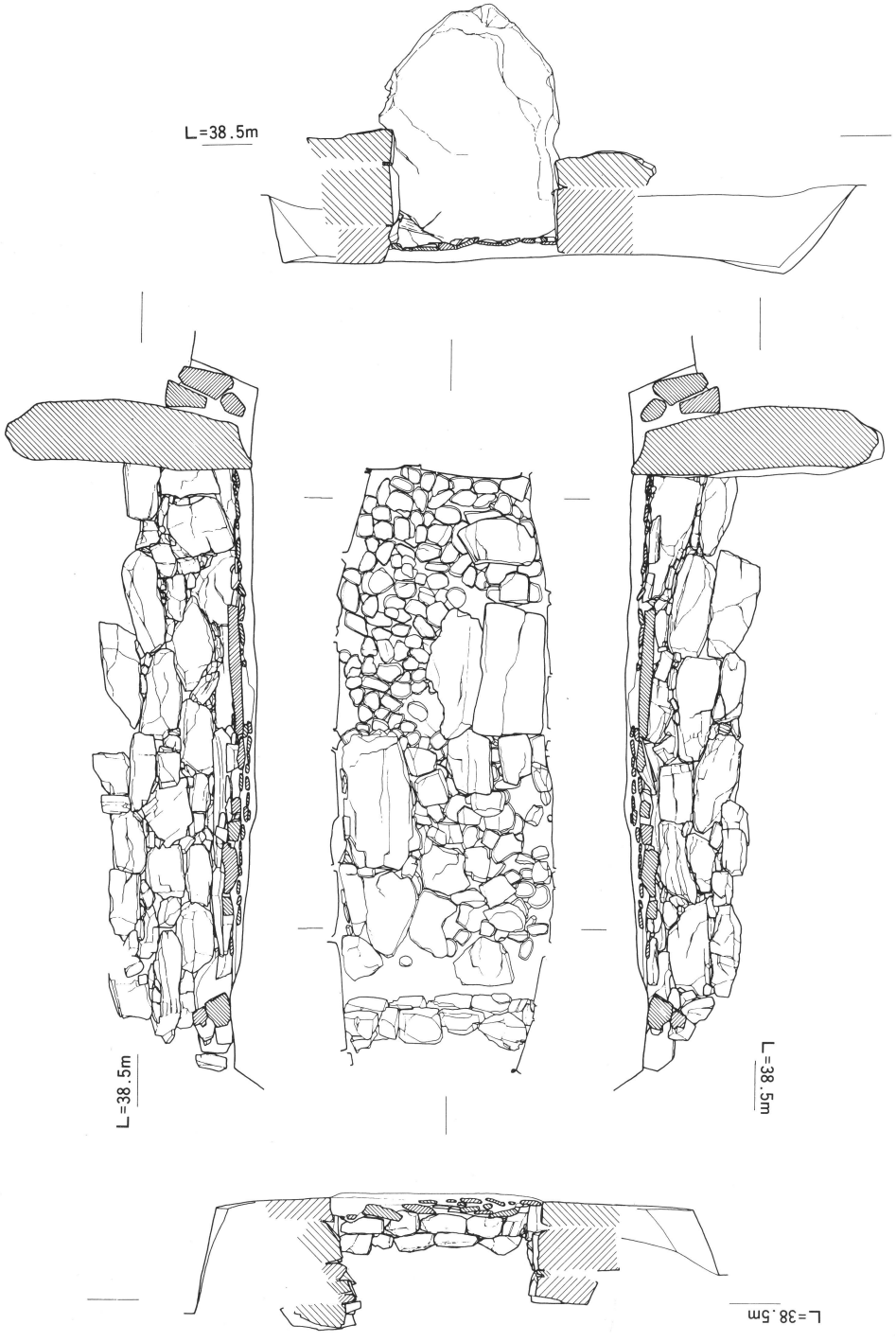


左：組み合わせ式石棺（奥壁より）

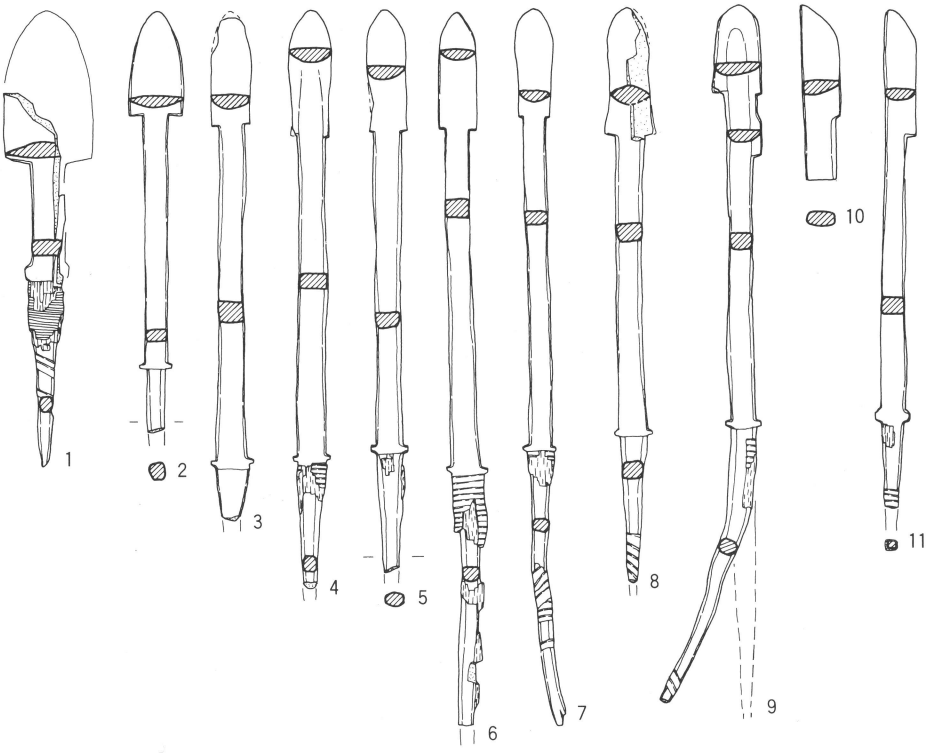
横穴式石室（第一次面）

遺物の出土状態

石室の掘り方と基底石



第２図　石室実測図



鉄鏃実測図（½）

出土遺物（須恵器・土師器）

＊高杯の器高14.4cm